
Lucky Devil !!

カルファール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L u c k y D e v i l ！！

【Nコード】

N 2 1 4 2 P

【作者名】

カルファール

【あらすじ】

大都会オールドヨークで働く低級悪魔ミック・ホッパー。趣味はリッチな人間の真似事。愛車は漆黒の跳ね馬、戦闘服はブランドスーツ。愛しい所有物にかまけるあまり、地獄からのノルマはそっちのけ。そんなうだつの上がないダメ悪魔に舞い込んだ、厄介な仕事とは――。海外ドラマ風、ドタバタアクションコメディー。

【悪魔によるプロローグ】（前書き）

> i 2 2 5 1 6 | 5 0 9 <

【悪魔によるプロローグ】

“悪魔”

——と聞いて、人間たちが思い浮かべるキーワード。

欲望、醜悪、ずる賢い、嘘つき、五芒星、黒い翼、三叉鉾、曲がった角、蹄、地獄、エトセトラ。

およそそいつったイメージが、今も昔もメジャーだと言える。

そして実際、悪魔ってのはそんなもんだ。

今も、昔も。

ただし、「角と蹄がある」という先入観はぬぐっていたらこう。

それはかの偉大なる悪魔バフォメット氏の雄姿であり、悪魔がみな黒山羊の角と蹄を持っているとは限らないからだ。

現に俺には角はないし、硬い蹄もない。

あるいは、近代的な悪魔像を持つ人間なら、もっとコミック的なものを想像したかもしれない。

冷徹な微笑みを浮かべ、漆黒のロングコートに身を包み、巨大武器と魔術を駆使して天使と戦うアンチヒーロー、とか。

しかし、残念ながら大衆が期待するこの手の演出は、世界の終焉が訪れない限りお目にかけることはないだろう。

そして生憎、まだ世界は終わりそうにない——少なくとも、今のところは。

つまり、俺が働いている場所は、ハリウッドでもなければ、アニメーションの中でもない。

ここは誰もが——悪魔も、ひいては天使でさえも——うんざりする

るような現実世界。

電子と喧騒と渋滞の都。

そんな都会の真ん中で、スーパーヒーローさながらの装いを披露しようものなら、「俺はコスプレイヤーだ」という言い訳が必要になる。

さらにいうと、悪魔の仕事は天使と殺り合うことでもなければ、世界征服でもない。

人間の魂を誘惑し、地獄へ招待してやること。

嫌われながらも必要不可欠で、実に退屈な仕事——公務員みたいなものなのだ。

——というわけで、俺はコスプレイヤーを名乗るのは遠慮させてもらって、アルマーニのカジュアルジャケットスーツに、カラーシャツの襟をゆるくはだけ、ポインテッドトゥのビジネスシューズを履いている。

そして巨大武器の代わりに、超薄型タッチパネルの最新携帯電話と、苦手な日光をやわらげてくれるサングラスなんかを、ポケットに入れておくのだ。

ついてない悪魔 1

一週間降り続いた雨が、ようやく上がった。

分厚い雲を割って西日がヴェールのように差し込み、街中をゆつたりと流れる川の水面を金色に輝かせている。

今にも天使が降りてきそうな情景——だが、この非情都市オールドヨークでは、果たして何人の人間がこの神々しい眺めにため息をつくだろうか。

少なくともこの街の人間たちは、自然の神秘なる美をこの場所に求めている。

そういった風景は、旅行会社のパンフレットか、旅番組で紹介されるような場所で見ることができないと思っているからだ。

ここは、そんな街だった。

野心の巣窟、同時に、それらの成れの果てが集う都である。

一台の黒いスポーツカーが、雨に塗れたボディをきらめかせながら、街を貫く中央通りを南に向かって猛進していた。

鼻先には一際鋭い輝きを放つ、跳ね馬のエンブレム——漆黒のフェラーリだった。

時速は百二十キロをオーバーしていて、ブレーキを踏むくらいなら歩道を走りそうな勢いである。

狂気の沙汰とは思えない走行の後には、それに連動した些細な事故や、無法者に対する抗議のクラクションがうるさく取り残されていた。

この事故多発地帯では、そういった光景もそれほど珍しくはなかったが、それにしても横暴だ。

トラブルメーカーの運転席に座っているのは、細身で目鼻立ちの

尖った若い男だった。

黒い髪を後ろに流し、濃度の高いサングラスの上に不機嫌そうなシワを立てている。

薄い唇を堅く結んでいて、顎骨の際立った様子から歯を食いしばっているのがわかった。

クリームで艶々に磨かれたビジネスシューズが、クラッチとアクセルをせわしなく踏む。

軽快なギアチェンジサウンドに合わせて、車は躍るように障害物をかわした。

交通量の多いメインストリートで時速百二十キロ以上をキープできるとは、おそらく誰も思うまい——そう、人間には不可能だ。しかし、彼には可能だった。

なぜなら、彼の正体は悪魔^{デビル}だからである。

それも、ただの悪魔じゃない。

すこぶる急いでいる悪魔だ。

「私の顔にどれだけ泥を塗ったら気が済むんだ、マイケル・ホッパー」

そう言ったのは彼ではなく、ダッシュボードに取り付けられた携帯ホルダーに収まっている、タッチパネル式の携帯電話だった。

黒く光る液晶画面に、“ミスター・グランド・ブラック”という青い文字が浮かび上がっている。

マイケル・ホッパーと名前を呼ばれ、悪魔は一層表情を険しくした。

「ミックです、マイケルじゃなくて」
ぼそりと言ったが、下腹を撃つような重低音にかき消されて電話

口には届かなかったらしく、グランド・ブラックは話を続けた。

「さすがは低級悪魔だな。期待通り、いやそれ以上の働きだ。おかげで、周りの出来損ない共まで凄腕のエリートに見えてくるよ」

ヤギがしゃべったらこんな感じだろうな、というような声色だった。

低く落ち着き払っていて、それが逆に、相手の怒りを明らかにしている。

ホッパーは短くため息をつく、大してためになりそうもない叱責を聞き流すために、勤めてどうでもいいことを考えた。

海外映画の吹き替え版で、よく脇役や敵役の声を吹き替えているあの俳優、名前をなんと叫ぶたかな。

いちいち覚えてなんかいないが、しゃがれた癖のある声や、冷静でシニカルなところなんてそっくりだ。

マイナー役すぎてスポットを浴びることはないのに、なぜか声を聞いただけで、そいつの吹き替えだとわかる。

あんた、あの俳優の声にそっくりですよ、あのくだらない映画の敵役にね、と言ってやれたら、どんなにかスッキリするだろう。

ああ、やっぱりダメだ。

そういうヤツに限って物語の終盤でカメラを掻っ攫う、キーパーソンだったりするんだから。

「今や人間どもは、我々悪魔が手をださずとも自ら地獄に堕ちてくるような時代だというのに、貴様は魂一つ墮せないどころか、我々の足を引っ張ってばかりだ。いったい、何をどうすればこういう結果になるのか、ぜひとも教えてもらいたい。二世紀に一度の逸材だよ」

語り聞かせるような物言いはとても誇らしげで、とてつもなく意地悪だ。

容赦ない真実の羅列を聴くでもなく聞きながら、いつそう奥歯を

かみ締める。

聞き流すというのも、案外氣力を使うものだ。

彼は口を一文字に閉ざし、ハンドルをきつく握りしめた。

同時に、車は赤信号を無視して交差点に突進し、クラクションの猛攻撃を受けた。

「同僚に自慢しなければならぬ、ことごとく期待を裏切ってくれる忠実な部下のことを。きっと彼らも喜ぶだろう——そう思わないか？」

今やその最新式携帯電話は、背もたれの高いオフィスチェアに深く背を預け、足を組んで、出来の悪い部下を罵る上司そのものだった。

たぶん、頭はやぎだろう。

三本の角を持ち、のみのような歯と、ピンク色の歯茎をむき出した、不気味な黒いやぎだ。

「あの」上司の皮肉がようやくひと段落ついたところで、ホッパーは恐る恐る切り出した。「俺の名前はミックです。ミック・ホッパー、マイケルじゃない」

彼にとって、名前を間違えられることは、これまでの実績を否定されることより重要だった。

ミックとマイケルじゃ、全然違う。

そして、そんなことはどうでもいい、と言われてしまう前に、続けて言った。

「それから仕事の件ですが、今回は絶対に上手くいくと報告したはずです」

彼の声はお世辞にも美声ではないが、フラットでどこかニヒルさを漂わせる声は氣に入っている。

しかし、今の声色には、上司に対する畏怖が隠し切れずに滲んでいた。

「今にも手に入りそうな魂があるんです。それも、半年前までは小心者で純粹だった。心優しい青年は今や、大胆不敵なイカサマ賭博師^{フェイカ}、薄汚れた魂。俺が育てたんですよ。たった半年で。これは快——どきやがれポンコツ車め！——快拳じゃありませんか？」

たとえば低級に限っても、悪魔の仕事はさまざまである。

地獄で亡者を地獄の門まで案内する者、亡者に罰を下す者、亡者のリストを管理する者。

そして、地上へ派遣される者。

低級悪魔ホッパーの仕事は、地上界に潜伏して、一つでも多くの魂を地獄へ堕とすことだった。

心に囁き、誘惑するのだ。

それはなんら特別な仕事ではなく、地上界には、いたるところに悪魔が潜んでいる。

もちろん、ベルゼブブなんて有名な名前ではない、ちっぽけな低級悪魔たちである。

とはいえ、彼は地上に派遣されてまだ三年目だった。

世紀を超える悪魔にとって、三年などという年月は取るに足るものではなく、したがってドがつくほどの新米だ。

しかも残念なことに、電話の向こうから上司が言ったとおり、あまり出来のいいほうではなかった。

「なにより、」ホッパーは、グランド・ブラックが答える前に話を続けた。「その魂は昨日交通事故にあって、今まさに死にそうになっています。ようは、いかに効率よく狩るかですよ」

本来ならば、一つの純な魂を手に入れるのに十年も二十年も費やすのが、悪魔の業である。

殺し屋が丁寧の下調べをし、標的を分析し、無防備になったその

瞬間に、一ミリの誤差もなく眉間を撃ち抜くと同じように。

それは美学ともいうべきプライドだろう。

しかし、そんなやり方は時代遅れだ。

殺し屋だって、今では無差別殺人に見せかけて標的を殺す——食中毒とか、さ。

「人間は、時間さえあれば懺悔しようとする。だから、真に邪悪な魂を育てるのには時間がかかるし、時間をかけたところで、最後の最後に懺悔なんぞされた日には、何もかも水の泡だ」

パンツと手を打って、両手を広げた。

彼がハンドルを離しても、車は安定して走り続けている。

「しかし、俺のやり方はどうですか？ 人間をある程度の小悪党に仕立て上げ、あとは事故でも起こしてもらえばいいんだ。小さな罪とはいえ、現時点では救いようがない。そして、懺悔をする時間すら残っちゃいない。地獄行きは確定。あと三十分もすれば、俺の手の中に堕ちてくる」

たとえ、その魂の逝き先が地獄のもつとも浅い階層だったとしても、“魂を一つ地獄に堕とす”という意味では、同じことだ。

ホッパーは広げた手を、ゆっくりと握り締める。

三十分後に手に入る魂の感触を想像して、優しく、そつと。

そして、完全に捕まえた、と感じたところで、ふと我に返ってハンドルを握ると、冷めた声で言った。

「それなのに、どうしてそう過去のことばかり掘り返して、俺のやる気をそぐようなことをするんです」

まったく、思い出したように説教電話など掛けてきやがって暇な野郎、と彼は思った。

どうせ、俺が簡単に魂を手に入れるのが、面白くないに決まっている。

すると、電話の向こうの上司は静かに笑った。

「たった一つの魂を得られそうになっただけで、ずいぶん威勢がいいものだ。それで、貴様のクス以下にまで落ちた名誉が挽回できるとでも？」

まるで、貴様の考えなど見通している、何を熱くなっているのだ、とでもいうような口調に腹が立った。

「お言葉ですが、俺は今までだって着実に成果を上げています。あなた方からの評価は低いかもしれませんが、ちゃんと地獄に貢献している」

電話越しともあって、ホッパーは大胆に訴えた。

滅多に発言権を与えられない者が自分の発言に酔ったときには、誰しもそうなるものだ。

「あなた方の考え方は古——あ、いや、ええつと。つまり、俺は俺なりのやり方を見つけたんです。一つの魂を完全に墮落させるのに何年も費やすより、何十何百という魂を少しずつ汚したほうが効率がいいとね。今の世の中、質より量ですよ」

目の前で突然停車したイエローキャブに、これでもかというほどクラクションを鳴らすと、黒いスポーツカーは白煙を残してさらにスピードを上げる。

「こうして俺が車を暴走させている後ろで、何人の人間が汚い暴言を口に出していると思いますか？ 何人の少年が俺の暴走を見てカッコいいと思い、将来不良に育つかを考えたことは？」

バックミラーを睨むと、ブルーベリーメントスをそのまま塗料に使ったかのような、ぼけた紫色のオープンカーに若い男女が四、五人乗っていて、ホッパーの車に追いつこうと躍起になっている。

「ないね」にべもなく、携帯電話は言った。「興味もない」

ホッパーはため息をつく、車をさらに三台抜いて、頭の悪そうなオープンカーを引き離れた。

「残念ながら、地獄は数字がすべてだ。過去の貴様の報告書から見ても、貴様は一切、地獄に貢献などしていない。いきがったところで、貴様が堕とした魂はゼロだ」

面白がるような口調で、電話が言った。

ゼロ。

ホッパーは道路の先を睨んだ。

赤いテールランプがひしめいている——渋滞だ。

「確かに、数字はゼロかもしれない。ですが、一切貢献していないというわけではないでしょう」

詰まった道路に舌打ちをしてからブレーキを踏み、九十度車を回転させて、横の道に滑り込む。

暢気に路を渡っていた小さな白犬を轢きそうになったが、それを無事にかわしてから、いつそ轢いてやればよかったと思った。

「一昨年は若者たちが崇拜する俳優に非人道的な発言をさせたし、その前の年には、逆再生すると“魔王万歳”というフレーズが入った音楽を流行させました。もちろん、それだけじゃないですよ。確かに去年は大きな功績を上げられませんでした。が、地上界は全体的に黒く汚れつつある。それらの実績と、今から手に入る魂の功績を考慮してもらえれば——」

「貴様は、」

グランド・ブラックは、野太い声でホッパーをさえぎった。

「いよいよ、本気で怒っている様子だ。」

「その腐れ俳優が、年の暮れに大規模なチャリティーコンサートを開催したことを知ってるのか？ 集まった募金で、のたれ死ぬはずだったガキどもが何人救われたかを」

ホッパーは閉口する。

知ってるけど、知りたくなかったし、思い出したくもなかった。

「貴様が中途半端に手を出すからだぞ。その男は、歴代に語り継が

れるであろう邪悪な魂の素質を持っていた、我々が何もしなくても地獄の碑石にそのなを刻むことができるくらいだな。なのに、ヤツは報道からのバッシングに反省し、見事に立ち直って聖人みたいになつてしまったではないか。これはまったくもって遺憾だ。豚でさえお前よりマシな働きをするぞ。善人を増やすくらいなら、何もしないほうがマシだからな！」

「あれは、実験だったんだ……。誰だって、初めは失敗する」

ホッパーは、上司に聞こえないくらい——上司の地獄耳にすらとどかないくらい——小さな声で呟いた。

まったく、あんたの言うとおり、中途半端に持ち出して叱られるくらいなら言わなきゃよかった。

「それから次は何だ、逆再生で魔王万歳だと？ 歌の題名はたしか“天国のあなたへ”だったか。あれは実に感動的な歌詞だったな。何人の人間が自殺を思いとどまったんだ？ ええ？」

グランド・ブラックの怒りはとどまらない。

かさぶたを乱暴に引っぺがされるような思いで、ホッパーは噛み締めた歯の隙間から浅く息を吸った。

「さあ、十人くらい、だったかな」

「二百だ、馬鹿者！」

声は車内に充満して破裂し、ホッパーはこめかみに激痛を感じた。悪魔の怒声には、それなりの魔力が宿る。

「逆再生して“魔王万歳”を聞いた人間は、片手に収まるほどしかいなかったというのに、貴様は二百もの地獄行き予備軍を改心させたのだ！ いっそ天使に転職するか！？ 私が口利きをしてやる！」

逆再生のトリックに気づいたのは、正確には二人だった。

そのうち一人は少年で、この事実をネットの動画サイトに投稿したが、「まあ、そう聞こえなくもない」「は？ 聞こえない。こんなにいい歌を汚すな」「無理がある」といったコメントに心折れて、投稿を取り下げている。

認めよう、確かにあれは大失敗だった。

それにしても、天使に転職しろだって？

そいつは言い過ぎだ、あんまりじゃないか。

ホッパーはひどく傷ついた。

「仕事もろくに出来ないくせに、その自信はどこからやってくるんだ。貴様が努力していることといえば、無駄に着飾ることばかりじゃないか。まったく、何のために派遣したのだから、こっちがわからなくなる」

こういう場合、説教はたいてい、どうでもいいことにまで飛び火する。

うんざりしつつ、ホッパーはハンドルを握る両手の間から自分の身体を見下ろした。

「あの、でも、「弱々しく言う。「スーツは、ここらじゃメジャーな衣装なんです、一応」

角を立てないようにそう言い返しながら、ジャケットの襟を撫でた。

素材は軽く、氣候にあわせて体温調節してくれる優れもの——何よりこの手触り。

アルマーニのニューモデルだ。

しかし、電話の向こうは沈黙したままだった。

なんとなく恐ろしくなって、その沈黙を埋めようとしやべりだす。

「それからですね、日光が嫌いなんでサングラスは必須なんです。

ズボンにベルト、靴下に靴は常識だし、それに下着を穿かないと捕まるんですよ。この世界はいろいろ面倒くさくて。これらは、どれも極々一般的な成人男性のスタイルなんです、何一つとして無駄はありません」

ブランドロゴを光らせるそれらの衣装をかばうように、ホッパー

は言った。

「聞くところによると、」相手は、まるでホッパの言い訳など聞かなかったかのごとく、平然と話題を変えた。「貴様はシャワーも浴びるそうだな」

「もちろんです」

ホッパは、さも当然というように言ってしまったから、急いで言い訳をまくしたてた。

「いや、俺は風呂もシャワーも大嫌いだし、そんなことに時間を費やしたくなかないんです。ですが、浴びないといけないんです、この社会に紛れ込むには。人間ってのは、思った以上に臭いに敏感なんです。悪魔だと見抜かれでもしたら、それこそ一大事でしょう？」

携帯電話は、しばらく黙してから言った。

「今まで、体臭で悪魔だと見破られた報告は聞いてない」

「ええそうでしょう。今までは、ね」

根拠はなかったが、ホッパは説得力のある声で言った。

たしか、中世あたりの本のどこかに表記されていたはずだ、悪魔は異臭を放つと。

「人間は、それだけ臭いに敏感になっているんです。消臭殺菌ブームなんて、今に始まったことではないですから」

彼は自分の言ったことがまさに真実だとばかりに、鷹揚に頷いた。俺は正しい、何も間違っちゃいない、と言い聞かせる。

しかし実際問題、悪魔が地上に潜伏する本来の目的を考えれば、ホッパはブランドスーツに身を包むことはないし、身体を鍛える必要も、シャワーを浴びる必要もなかった。

物陰にコソコソと潜み、人間の魂を付けねらっていればよいのだから。

スポーツカーに乗って国道を飛ばす必要も、当然ないのである。

けれども、ホッパーはそれらを好んだ。

なにしろ彼は低級悪魔で、地獄では上階級の悪魔に虐げられ、物を所有したためしかなかったのだ。

それが地上派遣が決まった途端、いきなり人間の肉体が与えられた——もちろん、初めは痩せぎすで肌艶の悪い、いかにも「悪魔です」といった容姿だったが。

さらに周りを見れば、地上界にはあらゆる物が溢れている。

この世界では、金さえあれば好きなものを所有できるのだ。

なんとこの贅沢！

そして彼は、自分の所有物を、常にぴかぴかに磨いておきたがった。

地上派遣の仕事は大変だと先輩悪魔に聞かされていたが、ホッパーにとつては“まさに天国”だったのだ（この比喻は完全に的確ではないが、地獄よりマシという意味では、概ね相応しい）。

サングラスをずらし、バックミラーに自分の顔を映せば、この三年間の成果がキリツと自分を睨み返してくる。

尖った鼻顎に、多少目つきは悪いものの、それがハリウッドスターを思わせる美貌であることは確かだ。

今や、数ある所有物の中で一番のお気に入りである。

車は細道を抜け、再び広い通りへ躍り出す。

すると、グランド・ブラックは耐えかねたようにクックと押し殺すような、不気味な笑い声を漏らした。

まさか怒鳴り声以外のものが聞こえてくるとは思わず、ホッパーは一瞬耳を疑った。

「今までは、か。時代は変わったものだ。ではやはり、貴様は風呂に入るのだな」

何が可笑しかったのか、掠れた声はそう言って笑う。

今までの怒鳴りようからすると、もはや気がふれたのではないかと思わざるをえないほど、可笑しくてたまらない様子だ。

ホッパ―は叱られるよりも不安な気持ちになり、サングラスを堀の深い眉下に押し戻した。

「それが、なにか？」

「風呂を好む悪魔というのも、致命的な話だ」

「いや、好んでいるわけじゃあ――」

「同じだろう。好んでいようとまいと、貴様は風呂に入るのだから？」

ホッパ―は怪訝な顔で携帯電話を見つめた。

身を淨めるという行為が悪魔にとって何を意味するのかを、考えないわけではない。

それ故に、彼は風呂が好きではなかった。

すべては、ただ所有物を汚したくないという一信のエゴイズムだ。確かに、水浴びは悪魔の習慣ではないが――だからといって、入浴と反悪魔をイコールで結んでしまうことはない。

それがホッパ―の持論だった。

しかし、所詮は持論だ。

少なくともグラント・ブラックの意地の悪い笑い声を聞く限り、その持論が周りに受け入れられることはなさそうだった。

やがて、グラント・ブラックはひとしきり笑ってから、咳払いをした。

「まあいい。今から魂を狩りに行くんだな？」

「ええ、まあ」

「さつさと様子を見て来い。今度はしくじるな」

妙に機嫌のよくなった上司は、そう言って話を終えた。

もちろん、電話を切る間際に捨て台詞を残して。
「せいぜい、奇跡が起ころぬことを祈るがいい」

電話は切れた。

ホッパーは、静かになった車内に取り残されたような気がした。
奇跡——鋭い響きをもつその言葉が、ねばつくく耳に残る。
なんて嫌味な捨て台詞だ。

「シャワーを浴びるくらいで、奇跡が起こってたまるか」
ぼやきながら、すっかり害された気分を紛らわせようと、カーラ
ジオをいじる。

——が路上に倒れていて、意識不明の重態です。女性に外傷はなく
——のリクエストは、一昨年のヒットチャート『天国のあなたへ』。
この歌は——

チャンネルを回し続けると、パッフェルベルのカノンが流れ始め
た。

ホッパーはハンドルに手を戻すと、上司の声とともに残るわだか
まりを考えないよう音楽に集中しようとした。
けれども、うまくはいかなかった。

もはや後がないことは明確だ。

確かに彼は、いかにも低級悪魔らしい些細な悪を地上界にもたら
してはいるが、地獄が提示するノルマをこれっぽっちも果たせてい
ない。

ホッパーは、上級悪魔たちが舌なめずりをしながら、自分の後ろ
にゆつくりと迫りつつあるのを感じていた。

低級悪魔をいたぶるのを何よりの楽しみにしている連中だ。

そして、曲がりなりにも悪魔である以上、ホッパーには、苦しみと快楽の両方を手放す道が与えられていない。

最悪の結末を——いや、終わりになき悪夢を想像すると、にわかに身が震えた。

なりふり構わず骨身を惜しんで働くより、自分の宝物を磨いたり、それらに囲まれてうつとりしているほうが楽しい。

けれども、働かなければ、その楽しみは地獄に変わる。

大丈夫だ、なんたって俺は今、たった半年で魂を手に入れようとしている。

やれば出来る悪魔なのさ。

深呼吸をすると、ホッパーはアクセルを限界まで踏み込んだ。

静かなバイオリンに合わせ、ギターがシャウトし始める。

じつにロックなカノンじゃないか。

ついてない悪魔 2

オールドヨークは、悪魔にとって比較的働きやすい街だといえる。ビジネス街であり、歓楽街であり、高級住宅街であり、闇市であり、ホームレス街であり——派手で陰湿、ホットでブリーク、野望と失望にあふれていた。

低級悪魔ミック・ホッパーは、初任でこの街へ派遣された。

以前派遣されていた悪魔が何かしらのミスを犯し、地獄へ強制送還されたその代役としてである。

もともとは、地獄の森に堕ちてきた魂を地獄の門まで案内する係りだった——なんともやりがいの無い、つまらぬ仕事だ。

地獄に堕ちてきたばかりの魂ときたら、往生際が悪い者や強がる者ばかりだから、ホッパーはいつも逃げ惑う亡者を取り押さえて地獄の門に蹴りいれなければならなかったし、言い訳や御託に付き合わされてうんざりだった。

それが、である。

何の前触れもなく、地上派遣の低級悪魔たちを束ねる総統グラント・ブラックに呼び出されると、事の次第を説明された次の瞬間には地上界へ放り出されていた。

あまりに急な転勤——むしろ、出世と言っても良いだろう。

地獄に魂を堕とすことは、地獄を地獄たらしめるために必要不可欠な仕事であり、案内係とは訳が違うのだ。

しかも、勤務地は初心者向けのオールドヨーク。

名も無いちつぽけな悪魔にとって、これほどラッキーなことはない。

派遣された当初、これはなにか裏があるのではないだろうかとホッパ―は考えていた。

もとより被害妄想は激しい性質だったのだ（悪魔としては実に健全なことである）。

「俺にはありとあらゆる可能性があり、見る目のあるグランド・ブラックは、その可能性に賭けたんだ」

「いや、俺には隠された力があつて、その力を恐れるあまり地獄には置いておけなくなったのかも」

「いやいや、もしかして、俺は知らないところでルシファーのお墨付きを戴いたのかもしれないぞ」

そして、それらの仮説のすべてが憶測の域を出ることはないとはつきり確信したとき、ある一つの真実が残った。

「地上勤務の低級悪魔たちがみなそろって能無しでは困るが、一人か二人くらいは、いじめ甲斐のある者がいたほうがいい」

出来の悪い低級悪魔は地獄へ連れ戻され、暇をもてあました上級悪魔たちによって、折檻などという生易しい言葉には到底留まりきれない罰を受けることになる。

ホッパ―は、その現場を一度ならず見てきた。

上級悪魔たちは、他の低級悪魔たちへの見せしめとして、わざと公に罰を与えるのだ。

目を背けたところで、苦渋に満ちたうめきや絶叫は、耳を覆う手すらも突き抜けた。

これぞまさしく悪魔の所業——それが人間ではなく低級悪魔なんかに向けられているわけだから、上級悪魔たちはずいぶん退屈しているらしい。

すなわち、上級悪魔の退屈しのぎのために地上に派遣されたってわけだ。

そして、“その時”はもうすぐそこまで来ている――。

プファン！

一際大きなクラクションがフェラーリのサイドミラーを掠め、ホッパーの意識は国道に戻った。

いつの間にか、テンポのよかった音楽は映画の告知へと変わっていた。

荘厳で悲壮感漂うサウンドトラック。

こいつのせいだとばかりに手を振り、ラジオを切る。

馬鹿だな、こうなることはわかっていたじゃないか。

自嘲がこみ上げた。

上級悪魔の真意が「見せしめ」であることを見抜いたのに、結局は、忠実にその使命を果たそうとしている。

ノルマを果たせず、そして、次の魂も手に入らなかったら――。
ホッパーの額に、つと冷たい汗が流れる。

唇を拭い、爪を噛み、その怯えた情けない自分の姿をバックミラーに見つけて、「クソッ」とハンドルを殴った。

地上に派遣される前の生活も酷いものだったが、地獄に強制送還された後の生活が以前よりマシになっているなんて。

「ハルマゲドンよりありえない」

自虐的に呟いた。

ハルマゲドン

いや、最終戦争はありえるから、ええっと、何だ。

とにかく、ありえない。

肉体的な苦痛のことは考えるまでもないが、それより気がかりなのは、馬よりも早いスポーツカーや、自分好みの家具を集めたデザイナーズマンションや、服、靴、この美しい肉体を手放すことだった。

一度得てしまうと、それらを手放さなければならぬ苦しみは、何も所有できずにいた頃の比ではない。

彼にとってこの財産は、「また手に入ればいいさ」というレヴエルのものではないのだ。

気分が悪くなって、ホッパーはパワーウィンドウをおろした。冷たい風がぼうぼうと顔を打ち、道路に響く重低音が流れ込んでくる。

吐き気のする想像を百二十キロ後方に置き去りにして、自慢の尖った鼻を擦った。

すべては、もしも魂が手に入らなかったらの話だ。

俺は絶対に魂を手に入れて、この危機的状況を乗り切る。

“奇跡”というグランド・ブラックの言葉のせいで、こんなにもネガティブになるなんてどうかしてる。

後ろへ流すようにセットしていた髪をグシャグシャとかき乱すと――しかし、ヘアスタイルは最後の――撫で、すつと元通りに整った――今度こそ運転に集中した。

病院はもうすぐだ。

あの男の魂が手に入れば、とりあえず来年は無事に迎えられる――奇跡さえ、起こっていなければ。

空が鮮やかに染まっていた。

朱と紫みを帯びた眩い雲が太陽を囲むように広がり、あたかも、その向こうに清浄で荘厳な世界が広がっているかのように錯覚させる。

ホッパーは雨が好きだったが、雨が過ぎ去った後に訪れる、潤い

に満ちた晴れ空は好きではない。

大好きな雨が、灰色に汚れた大気を綺麗に洗浄してしまうと、裏切られたような気持ちになる。

明日も晴れそうだ。

忌々しい夕焼けを睨みつつ、病院の駐車場に車を進入させる。キュルキュルとタイヤをスリップさせながら、ワゴン車の横にピタリと駐車すると、近くにいた老人たちの一団が、脅かされたアヒルのようにせっせと逃げた。

まだ走り足りないとはかりに唸る車のエンジンを切り、バックミラーを自分に向けて、髪や襟元を整える。

鏡に映るサングラスの男は、ずいぶん不安そうな眼差しをよこしている。

——交通事故の男、奇跡的に回復？

いや、もしかしたら、奇跡的に無傷だったのかもしれない。

「なんて情けない顔をしてるんだ」

ホッパーは彼を叱った。

奇跡なんてありえない、絶対にありえないと、呪文のように言いながら車を降りる。

「事故の衝撃で、フロントガラスを突き破って外に飛び出したんだぞ。大丈夫だホッパー、自信を持て。ヤツは確実に死ぬ」

そう言っ、サイドミラーに頷いてみせた。

言い聞かせること。

これは、対人間で実証済みの、自己暗示という一番手っ取り早い魔術だ。

たとえ問題が解決していなくとも、自信は保たれる。

その病院は、新しくもなければ古くもなく、大きくもなければ狭

くもない。

白い長方形を組み合わせただけの、何の特徴もない建物だった。清潔さを表す白は灰色にくすみ、黒い雨筋が目立つようになる。その辺りの一般住宅よりよほど不潔に見える。

なかなかいい病院だ、とホッパーは思った。

何かの間違いで悪魔の子供が誕生するとしたら、このように寂れた病院に違いない。

指に引つ掛けた車のキーを振り回しながら、彼は大腿に院内を進んだ。

すれ違う看護師や患者たちは、そのチンピラのような男に一瞥をくれるものの、特に何の反応もしめさない。

それが、悪魔の存在だ。

人間たちが気づいていないだけで、悪魔は存外、いたるところに紛れている。

ホッパーが半年をかけて地獄に墮とそうとしている魂——オーガスト・スミスは、器の小さな男だった。

身寄りはあるが恋人はおらず、小心者で人の顔色ばかり伺っているような若者だ。

ろくに発言も出来ず、職もなかなか決まらない。

ようやく就いた職場でも、彼はぱつとしない外見に相応な、ぱつとしない成績だった。

けれども、彼はまだ純真だった。

傷つくのを恐れ、同時に、人を傷つけることを恐れていたからだ。

そんな冴えない小男が、悪魔の囁きによってギャンブルに嵌り、賭博師とまで呼べるほどの技を身につけた頃には、社交的でデリカシーのない性格に変貌していた。

自分の得意分野を見つけた人間は、誰だって有頂天になる。

とりわけ、その分野を見つけるのに時間を要したのなら、なおさらだ。

そして才能だけを頼りにのし上がった賭博師は、自分より強い者を超える努力を惜しみ、イカサマへ走った。

勝利するほど敬われる、金も女も寄ってくる。

イカサマは実力ではないが、ばれないイカサマは、実力だ。

男は狭い世界の中で、神のように君臨していると思っていた。

ギャンブルの聖地ロスにも行ったことがないのに、だ。

だが、それは誰しもが経験する、若気の至りというものだった――その至りが、犯罪の域に達するか否かは個人差があるけれども。

青年は、若さゆえに自分の能力を過信し、大胆になる。

回りの人間を見切り、超越した気になる。

けれども、成長していくその過程で、人間は必ず過去の過ちを償うものだ。

それもたいてい、無意識のうちに。

だから、若者に悪の種を植える悪魔は、常に気が気ではない。

しかし、このオーガスト・スミスの場合、懺悔などという言葉が彼の胸中に生まれるまでもなく交通事故を起こしてしまった。

州間ハイウェイで、煽ってきた黒いフェラーリの挑発に乗り、時速百八十キロでガードレールに突っ込んだのだ。

残念ながら、本人が思っているほど運転は上手くなかったらしい。

ホッパーはほくそ笑んでいた。

なんてちよろい仕事なんだ。

いつも偉そうに振舞ったり、もっともらしく怒鳴りつけてくる上級悪魔たちが、あんなに苦心してやり遂げることを、俺はこうも簡単にこなしている。

彼も有頂天だった――狙った男と同じように。

オーガストの魂は、もう間もなく手に入る。
廊下を進む足音が高らかに響いた。

そのとき——医師や患者や見舞い人が行きかう廊下で、彼は背の高い男とすれ違った。

長い廊下のどこから現れたのかは、考え事をしていたせいで気づかなかったが、男が横を通り抜ける瞬間だけが、妙にゆっくりと感じられた。

浅い色のジーンズに、オフホワイトの薄いパーカーを着ている。
すれ違う一瞬、ホッパ―は目でその姿を追っていた。

“雪のように白い肌”という比喻を、体格の良い男に使うのはどうかと思うが、それ以外でその男の肌を的確に表現できる言葉は見当たらない。

どこか冷たさのある肌色だ。
短い髪も憂いを漂わせる眉も、ほとんど白に近い銀色をしていて、全体的に色素が薄い。

無表情に前を見据えるブルーグレーの瞳は、ハツとするほど澄み渡っていた。

まるで身体から発光してるんじゃないかと思うほど、その姿はホッパ―のサングラスの奥に焼きついた。

男が視界の後ろに流れてから数歩。

ホッパ―は立ち止まり、振り返っていた。

カルテを手に廊下を行き来する看護師たちの中にまぎれていく、
白い男の後姿。

妙な気配をまとった男だ。

何だ、今のは。

不審な思いを引きずりながら、再び歩き出す。

人間ではなかった、間違いなく。

ゴースト
幽霊？

それとも……。

——せいぜい、奇跡が起こらぬことを祈るがいい。

不意に、憎たらしいヤギの笑い声が脳裏に響いた。

そのとたん、ホッパーは呼吸を——鼓動をも——忘れて青ざめた。
エンジン
「天使……！」

再び立ち止まり、無駄とわかりながらも、もう一度廊下を顧みる。
そこに、男の姿はない。

白かった。

眩かった。

そして、人間ではなく、おそらく悪魔とも違っていた。

答えは必然的に絞られている——今のは天使だ。

ホッパーは喉がからからになり、彼を追いかけようかと身を乗り出した。

——いや、まてよ。

仮に——あくまでも仮にだ——天使が奇跡を起こすためにこの病院に来ていたとして、その彼が出口に向かっているということは？

すなわち、事は、もう済んでしまったのでは——。

みなまで考える必要はなかった。

はじかれたように、彼は走り出していた。

階段を二段飛ばしで駆け上がり、鉢合わせた医師にカルテをぶちまけさせ、そのカルテを踏んで転びそうになりながら、ひた走りに病室を目指す。

自分が狙っている魂とは関係ない、そう考えようとした。
そうさ、ヤツはたまたま、この病院にいただけだ。

「……」

けれども、早急に様子を見たほうがよい、確実に。

ホッパーは集中治療室を通り過ぎ、慌てて戻ってきて、ガラス戸に張り付くようにして中を覗いた。

そして、整えられた真っ白なベッドシートに、こめかみを強打されたような衝撃を受けた。

いない。

ベッドは空だ。

悪い予感が、現実になろうとしている。

「冗談だろ」

くらくらしながら病室内に入ると、ベッドが本当に空なのかを確かめた。

オーガスト・スミスが透明人間でもない限り、そこには確かに誰もいない。

退院したのか？ 奇跡的に？

ベッドの周りをぐるりと回り、立てられた背もたれの裏側を覗いてみたものの、臨終間近の患者が隠れんぼに興じているとは考えにくく、やはりそこにもいなかった。

最悪の事態に身体が凍りつくと、次の瞬間には怒りがこみ上げて熱くなり、そして、焦りが生じた。

こんなところで、終わるわけにはいかない。

ホッパーは自分を落ち着かせるために、力を入れて額をなであげ、そのまま髪を後ろへすいた。

冷や汗がすつと冷え、アルコールのように蒸発する。

慌てるな、ベッドが空なだけだ。

きつと、やつは予定より早く死んじまって霊安室にいるんだ、きつとそうだ。

早く魂を回収しなくちゃあ。

深呼吸とともに、ジャケットの襟をぴんと張って首にしっかりとかかるようにした。

そして、なりふり構わずに、再び走り出した。

医療器具を乗せたワゴンや救急患者を運ぶストレッチャーに轢かれそうになること数回。

彼はどうにか地下へ続く階段へたどり着き、すべるように降りていった。

恰幅の良い看護師との正面衝突をかううじてかわすと、そこが霊安室だった。

室温を二度に保った狭い室内に、ベッドが五つ、遺体は一つ。

横たわる遺体へ歩み寄り、被されたシーツを剥ぐと、薄暗い照明に浮かび上がる青白い肉体が、ホッパーのサングラスを下から照らした。

それは——安らかに目を閉じた、オーガスト・スミスの遺体だった。

思わずため息をつき、胸をなでおろした。

高慢だった青年は、大人しく静かに眠っている。

若い肌はきめ細かく、無垢に見えた。

黒い髪が生え際から覗く、致命傷の断片が痛ましい。

「まったく、人騒がせな」ホッパーはどす黒いかさぶたから目を背けて言った。「ハロー。迎えにきたぞ、オーガスト・スミス」

オーガストが答えるはずがない——彼は死んでいるのだから。
その瞬間、ホッパーはとんでもないことに気が付いた。

——死んでるじゃないか！

そこには、回収すべき魂がなかったのである。

ついてない悪魔 3

ホッパーは、青年の遺体を前に呆然としていた。

まだ魂を回収していないというのに、そこには魂がない。

すでに何者かが回収していったのか、あるいは、“奇跡的に”天国へ送ってしまったのか。

明白なことは、目の前に横たわっているオーガスト・スミスの肉体が、間違いなく死亡しているということだった。

「ばかな」

遺体の上に屈み、顎を無理やりこじ開けて口の中を覗き込む。
やはり、ない。

この肉体は空っぽだ。

悲愴感がそのまま弱々しい悲鳴になり、ホッパーは屈んで周囲を必死に探した。

ベッドの下は、カーテンの裏はと、尻尾の影を探る犬のように見回したが、無論、魂なんてものは、そんなところに転がっているような代物ではない。

結局、部屋の四隅に溜まる埃以外のものを発見できないまま、彼はよろよろと立ち上がった。

こみ上げてきた怒りで、拳が震える。

「ふざけやがって、チクショウ！」

ベッドを蹴飛ばそうと足を引く――が、靴に傷がつくと困るので、床を踏み鳴らすにとどまった。

くそ、冷静になるんだホッパー。

この靴はオーダーメイドで昨日仕上がったばかり――じゃなくて、ホッパーは噛み締めた歯の隙間から息を吸い、熱くなった肉体を冷やした。

目を閉じ、頭の中を整理する。

これはまだ想定内の出来事だ。

廊下である天使とすれ違った瞬間から、こうなっていることは予測できていた——出来れば、信じたくはなかったけれども。

そして自分は、その事実を確かめるためにここへ来て、今その真実が明らかになった。

それならば、次にすべきことは明白だ。

天使を追うこと以外にない。

ホッパーは白いオーガストの肉体を見下ろしながら、ホワイトブルンドの男の姿を、サングラスの奥に鮮明に思い描いていた。

あいつが攫っていったのか、あるいは天国へ送ったのかはわからないが、事情を知っているとみて間違いない。

とにかく、まだ間に合う。

牙を剥いて唸ると、ホッパーは猟犬のごとく霊安室を飛び出した。

階段を風のように駆け上がる。

だが、追跡に燃える彼の出鼻を挫くように、一つ目の踊り場を曲がったところで、目の前に巨大な何かが立ちふさがった。

それは熱くて、柔らかくて、しかし、弾力性のない誰かの腹だった。

「おうつ」

腹は苦しげにうめくと、胸に飛び込んできたホッパーの二の腕を掴んだ。

まさか肉の塊が階段を塞いでいるとは思わなかった。

ホッパーは慌ててその胸から顔を上げ、吠える。

「おい、どけ……！」

「気をつけてくれ、腹のおさまりが悪いんだ。もどしちまうよ」

腹の上に据えられた肉付きの良い顔が、その図体に似合わぬ高い声で、慌てるホッパーに対して暢気に言った。

鼻と頬が赤らんでいて、まるでブリキ人形のようなのだ。

彼は豚のようにつぶらな瞳でしげしげとホッパーを見つめると、ぱつと表情を明るくした。

「うん？ お前、マイケルじゃないか、マイケル・ホッパー！」

ホッパーの背中を親しげに叩きながら、嬉しそうに贅肉を震わせる。

聞き覚えのある声にますます嫌悪感を募らせたホッパーは、男の肩を押して身体を出来るだけ離れた。

「マイケルじゃない、ミックだ！ 何度言ったらわかるんだ、バディ・グリーンジー！」

それは、同じ地区で働く低級悪魔だった。

ワンダーエッグに手足が生えたかのような肥満症の中年男は、薄くなった頭をかきむしりながら、人懐っこい笑みを浮かべている。

「久しぶりじゃないか、ここで何をしてるんだ？ 魂を狩りに来たのか？」

「そんなとこだ。悪いが俺は先を急ぐ」

ホッパーは無愛想に答えると、彼をすり抜けて立ち去ろうとした。しかし、バディは掴んだ腕を強く引き戻して、「まあ待てよ」と言う。

その力があまりに強いので、危うく再び彼の胸に飛び込むところだった。

「何だよ！」

バディを睨み、次いで掴まれた腕に視線を落とす。

追うべき者のことも気になるが、今さっきまでポテトチップスを手づかみで食べていたのではないかと疑いたくなるようなバディの指も気になった。

ああ、俺のアルマーニに食い込んでいるじゃないか。

「なにをそんなに慌ててるんだ」

バディはのんびりと言う。

世の中の悪魔が全員、自分と同じように暇なのだと思い込んでいるに違いない。

そんな彼を、蔑むようにじろりと見る。

冗談じゃない、俺は五分あればサウナに籠りたいほど忙しい毎日を送ってるんだ。

そして今この一秒で、俺は階段を何段駆け上げれるんだ？

「関係ない」

「手伝おうか？」

「必要ない」

猫の手だったら借りたい——けれども、油でベタついた手は御免被る。

「そうだマイケル、いや、ミック。実は面白い話があるんだ」どうしてもこの再会を逃すまいとしているのか、バディはしつこく言った。「お前にだけ話してやろうと思って——」

「申し訳ない！」ついに痺れを切らすと、ホッパーはちつとも申し訳なくなさそうな声で怒鳴った。「急いでるんだよ、わかるだろ！」

「わかった、わかった。怒鳴るなよ。俺はお前に、いい話をしようと思うただけさ。同級のよしみだろ？」

バディはなだめるようにホッパーの腕を叩き、手を離して、降参するように肩の上まで挙げた。

時間を三十分くらい無駄にした気分だ。

おまけに、スーツに油染みが……いや、今はそれどころではない。ホッパーはすぐさま走り出していた。

「ありがたいが、今はだめだ！ またな」

階段の下に言い残す。

そもそも、悪魔の面白い話が、美味かったためしなどないのだ。

「そうかい、残念だよ。ま、せいぜい頑張んな。そういえばさつき、妙なやつを見たぜ。もしかしたら天使かも——！」

バディが叫んでいる。

遠のくその声を聞きながら、今そいつを追ってるんだよ！ と、ホッパーは胸中で毒づいた。

それにしても、美味い話ってなんだったんだろう。

もしかして、失った魂を取り戻すより簡単に、ノルマを達成できる話だったりして？

そう思ったものの、すぐさま首を横に振った。

あいつは俺が慌てているのを見て、弱みに付け込もうとしているに違いない。

信じられるのは、己のみだ。

エントランスを出て、ステップの上から駐車場を見渡す。

いよいよ姿を消そうとしている太陽がギリリとサングラスを刺したが、遮光板なみに濃いスモークは、完璧に彼の瞳をガードしていた。

子連れの父親、老夫婦、若い看護師たちの一団、赤いコートの女

——ぐるりと駐車場を見回し、そしてついに見つけた。

背の高い、白い男の後姿だ。

駐車場を出て、歩み去ろうとしている。

「おい待て！」

ホッパーはステップを飛び越えた。

間に合った！ ——そう確信して、全力疾走で男に向かう。

しかし、その男を凝視するあまり、彼には迫り来る赤い魔の手がまるで見えていなかった。

両手を広げて斜め前から駆けてくる、赤いコートにサングラスを

かけた女の姿が。

「ミック！ 私も会いたかった！」

彼女がそう叫んだとき、初めてホッパーは彼女の姿を捉えた。

自分の懷に飛び込んでくる。

避けるには遅すぎた――。

彼女にとっては、どうやらドラマの感動的な再会シーンであるらしかった。

しかし、ホッパーにとっては、トライを猛烈なタックルによって阻まれる、ラグビーの試合中継のようだ。

内臓から搾り出された自分のうめき声を聞いて、彼の試合は終了した。

アンラッキー
ついてない。

悪魔は、食事を取らない。

しかし、それはあくまでも“必要がない”からであって、食事ができないわけではない。

以上の点を踏まえた上で、なおかつこのホッパーという悪魔の性を考慮すれば、彼がオールドヨークの夜景を一望できる都心ホテルの最上階で、香草が香る子羊のローストを前にしていても、とりわけ違和感はないだろう。

ここは会員制のレストランで、ミック・ホッパー氏は駐車料金も無料になるゴールドパスを持っている。

彼の向かいには、黒いイブニングドレスに身を包んだ若い女が座っていた。

アンジェラ・グラットと名乗るその女は、グラマラスな肉体に相

応しい整った顔——どこかで見たことのある顔——をしている。

「女優だと思っただが……」と、周りは眉をひそめるが、どうしても名前を思い出せない。

彼女はそんな存在だった。

黒い巻き髪は緩やかに胸元に垂れ、男たちの視線を、嫌でもその谷間に向けさせる。

艶のある小麦肌に、黒薔薇色の唇、そして長い睫毛に縁取られた大きな瞳。

その瞳は金色で、瞳孔が縦に細長く、ネコのようなだった。

サングラスを外したホッパーも、同じく不適に光るその瞳を露にしている。

だが、アンジェラをネコとたとえるのなら、彼はキツネのほうが雰囲気に合う。

もともと、彼がキツネほど狡賢かったなら、この物語は始まりもしなかったわけだけでも。

「機嫌を直してミック、マイハニー。私、あなたに会えて嬉しかったのよ」

喉を鳴らすような甘え声で、アンジェラは言った。

頬杖をつき、ホッパーを上目遣いに見つめる。

それに対して、彼は顎を上げて微笑をたたえ、彼女を見つめ返した。

愛を語るような優しい声で、囁くように言う。

「アンジェラ、ベイビーガール。俺の後頭部を陥没させるくらいだ。勢いに愛を感じたよ」

アンジェラは肩をすくめ——そうすると、胸の谷間がいつそう際立つ——もじもじと身体をゆすった。

「陥没なんてしてないわ。あなたの頭蓋骨は完璧よ、スウィーティ

「いいや、マイ・セクシー」ホッパーは悩ましげにため息をつき、ゆるゆると首を振った。「コロンブスの卵のように、俺は後頭部で立ってみせるだろう」

「バカを言わないで。たんこぶができただけよ、ダーリン」

「どっちだって同じことだろう、ラヴ」

そうして二人は黙り込むと、うっとり——火花が散るくらい——見つめあった。

その熱いやり取りを、先に切り上げたのはアンジェラだ。

「何よ。せっかく再会を喜んでいるのに、いつまでも女々しいわ。頭蓋骨陥没なんて、五分で治せるくせに！」

どすの利いた声で言っていると、彼女はナプキンで唇を拭い、それをテーブルの端に叩きつけた。

短い鼻息をつき、ワイングラスを空ける。

「ああ、治せるさ、現にもう治ってる。ただし、十五分もかった！」ホッパーも眉間に深くシワを刻むと、片方の牙を剥くように唇を引きつらせた。「しかも魂には逃げられちまうし。愛してるよアンジェラ、だけどタイミングが悪すぎた！」

抑えていた怒りが爆発して、彼はわめくように怒鳴った。

「魂って、何のこと？」

「なんでもない！」

ああ、怒りに任せて自分の失態を吐露するなんて、まったくどうかしてる。

ホッパーは右手をテーブルに肘を突き、顔の半分を預けた。

頭の中が混沌としている——魂は手に入らなかった——事情を知っているであろう男は取り逃がした——しかも、完全無欠のこの身体が傷ついた。

どれも許しがたい最悪の出来事だ——とりわけ、魂が手に入らな

かったことがもつとも深刻——いや待て。傷は治ったとはいえ、この完璧な肉体が怪我をしたという事実のほうの問題なんじゃないか？
今まで、一度も血を流したことなくてなかったこの肉体が——おいおい、そんなことより、なぜすぐに男を追いかけてなかった？

もう少して追いつけたのに——冗談じゃない、頭蓋骨が陥没しているのを放っておいて、痕でも残ったらどうするんだ。

何を。魂が手に入らなければ、どのみちこの肉体はおしまいだ——しかし、無事に魂を手に入れたところで、頭頂部にハゲが残った？ 魔力で見えなくするのにどのくらいかかる？ それに、たとえ治ったところで「ハゲた」という過去までは消えないんだぞ。

——というか俺は、こんなところで食事をしている場合なのか？

「ミツク？」

アンジェラの声に呼び戻されたとき、ホッパーの中の怒りは半分ほど相殺していた。

そうだ、起こってしまったものはどうしようもない。

次の手を考えるか、開き直るかしかないのだ。

「いや、なんでもない」もう怒っていないがこれだけは言わせてくれ、というような口調で言った。「とにかく、傷一つ治すのだから大変な労力を使うんだ。俺たちは低級悪魔なんだぞ。手品程度の魔力しかないんだから」

すると、アンジェラはフンと鼻を鳴らした。

「俺たち」なんて言わないで。私だって低級だけど、あんたなんかより腕も魔力もあるんだから」

そう、私たちは対等ではないのよ、というように、アンジェラは冷たい笑みを浮かべた。

ホッパーの中に残った怒りは、どうやら彼女の怒りを下回ってしまっただけ。

痛いところを突かれた気がして、彼は小さく喉を鳴らした。

「待て待て、そういうのはやめよう。つまり、お互いを蔑むのは」

「お互いじゃないわ、一方的よ」

ホッパーは反射的に言い返そうと開いた口から、言葉はでなかった。

その口を開いたまま、尋ねるように眉を上げたが、アンジェラはまっすぐに彼を見つめたまま、説得するように頷いた。

「私は、あなたより強い。腕力も、魔力も」

「でも、」

「この関係を終わらせられるのは、私。主導権を握っているのは、私なのよ、マイケル」

「おい、俺はミッ——」

「あなたには命令出来ないわ、マイケル・ホッパー」アンジェラは勝ち誇ったように微笑んだ。「なんて呼んで欲しいのか、言ってごらんなさい」

「……」

低級悪魔アンジェラ・グラットは、ホッパーより数年早くこの街で働いていた。

やがて二人はスポーツジムで出会い、意気投合して恋人を演じる仲となる。

二人とも美しい肉体と至高のブランド品を所有し、それらを常に磨き続けることに骨身を惜しまない、数少ない同士だったのだ。

だがしかし、意気投合した悪魔が味方かといえば、それは断じてイエスではない。

たとえ恋人を演じていても両者の間に情はなく、ただ、あらゆるものを所有したいと思う悪魔同士の、利害関係の一致でしかないのだ。

ホッパーが恐れていることは、彼女に弱みを握られてしまうと、自分までも所有物にされかねないということである——が。

状況から言つて、すでに彼は彼女の掌に落ちていた。

というよりは、はじめから。

同じ低級とはいえ、彼女のほうが魔力が数段上だったのだ。

もちろん、本人は断固として認めない——この世に生じた瞬間から、敗北が決まっているなどということは。

「まあ、いいさ。好きに呼べよ、マイ・ラヴ」

どうにか平静さを保つと——本当はやりきれない気持ちにさいなまれていたが、寛大さは良い男の美德である——椅子の上で姿勢を正し、ナイフとフォークを上品に使って、肉を一切れ味わった。

人間を演じるならセレブが良い。

そしてセレブなら、マナーも良くなければならない。

「ところで、なぜあの病院に？」

すると、アンジェラは、今までの怒りを忘れたかのように微笑み、「あなたに会いたかっただけ」と甘い声で言つて、同じように肉を口に入れた。

再び、恋人ごっこを始める。

「だって、一月も連絡をくれなかったわ。もしかして、行方不明になつたんじゃないかと思つて」

「行方不明？」

「ええそう。心配したんだから」

アンジェラが深刻そうに眉を寄せるので、ホッパーはこの女ドラマを見すぎたな、と思つた。

「行方不明とは大袈裟な。君はそんなに心配性だったのか？」

「大袈裟なんかじゃない」もどかしそうに首を振ると、アンジェラはホッパーに顔を寄せて、抑えた声で言つた。「あなたの前にこの街に派遣されていた悪魔、知つてるでしょう？」

「間接的にはな。彼がどうした？」

「行方不明なのよ。地獄に強制送還されたって聞いたけど、実際は、

戻らなかった。忽然と消えてしまったの」

赤い唇からこぼれだすアンジェラの囁き声には、ゾクツとするような妖艶さと不気味さがあり、ホッパーは無意識に生唾を飲み込んでいた。

そして、そんな話はまったく信じられないと——思っているように見えればいいと思いつながら——静かに笑った。

「まさか。悪魔が行方不明になるなんて。地獄の監視下から逃げられるわけがない」

「そうよ。だけど確かに、行方がわからない。地獄にいるのか、地上にいるのか——天国にいるのか」誰にもわからないの、と言って、アンジェラはきらりと目を光らせた。「それどころか、上級悪魔たちはこの事実を語ろうともしていないわ。もし彼が罰を恐れて逃げ出したのだとすれば、上は全力で彼を探させるはずなのに」

「上級悪魔に何かされたんじゃないか？ あいつらは、色々な拷問方法を思いつく」

ホッパーは顔をしかめた。

近いうちに、自分も辿るかもしれない道だ。

「別に珍しいことじゃないだろう」強がって言う。

「そうかしら。でももう三年よ？ 彼らは、飽きたら開放してくれるはずじゃない」

“してくれる”という言い方に、低級悪魔らしい卑下の響きがある。

「だから、まだ飽きてないってことだ」

そう、上級悪魔の折檻が続いているのだ——三年も。

何だこの会話は、とホッパーは思った。

まるで、自分の首を絞めているような気分だった。

彼が話題を変えたがっているのを、アンジェラは見抜いたらしい。「とにかく気をつけてほしいの。あなたみたいに気の合う悪魔は、

地獄にはそういないから」

珍しく、彼女は素直にそう言っ、話題から引き下がった。

そして、逆にもうこの話はしないで、というように、いつの間にか満たされていたワインを一気に飲む。

「ああ。気をつけるよ、ベイビー」ホッパーはなんとなく怪訝に思いながら、自分もワイングラスを傾けた。「俺もお前と離れ離れにはなりたくない」

前の悪魔の身に、何が起こったのかはわからない。

しかし、それは今のホッパーにとって、決して他人事ではなかった。

不穏な何かは、確実に自分にも迫ってきている。

とにかく、まずは奪われた魂を取り返さなければ。

見失ったあの男を、探し出す必要がある。

決意を胸に、ホッパーは熱いワインを飲み干した。

そして——小さく、しゃっくりをした。

とりあえず、夜が明けてからにしよう、もしかしたら最後になるかもしれない夜だから——そんな甘い考えが、ワインと共に胸中で燃えはじめていた。

不適任コンビ 1

短いうめき声とともに、ホッパーは目を覚ました。

いや、実際は眠っていたわけではない。

悪魔は睡眠をとる必要がなかったし——もちろん、この悪魔は眠るのも好きだが——なにより悩みの種がふつふつと成長を続けているというのに、眠っている場合ではなかった。

ホッパーはただベッドに横になって、目を閉じていただけだ。

そして、あらゆるものを失い、あらゆる種の苦痛を味わうという、想像の淵から我に返った。

紺青に沈んだ部屋の中でため息をつきながら、ホッパーは両手で顔を擦った。

いつそ、なにかも忘れて眠ればよかった。

起こりもしないことを考えて不安を増幅させるなんて、一体この悪魔の仕業だ？

しかし、考えずにはいられない。

恐怖と焦燥にすっかり絡め取られて、目を背けようがなかった。

一刻も早く魂を取り戻さないと、まずいことになるというのに。

そう、こんなところで——もとい、こんなに素敵な部屋で、横になっっている場合ではないのだ。

ここは、ホッパーの自慢のすみかである。

オールドヨークの都心近くに建つ二十三階建てビルの、十三階だった。

もっと高いビルは他にもあるが、ホッパーはそれほど天国に近づくたくはなかったし、かといって悪魔らしく地下に住まおうなどとは微塵も考えなかった。

十三というのは、なんとも居心地の良い高さだ。

ちなみに、多くの人間が承知のとおり、十三というのは忌み数である。

十三番目は堕天使の数字で、最後の晩餐では裏切り者ユダの席であり、十三日の金曜日はジェイソン・ボーヒーズがチェーンソーを引きずって——いや違った、彼はチェーンソーを使わない。

とにかく、^{デビルズ・ダース}13はいつの時代も、人間にささやかな胸騒ぎを起こさせる。

それはオールドヨークでも例外ではなく、この街のビルのほとんどは、縁起が悪いとされる数字を避けて十二の次を十四としている。ホッパーは、地上界に派遣されてすぐに、そこに目をつけた。

彼は新築されたマンションの十三階部分が十四階と名づけられる前に、フロア一帯を自分のテリトリーに収めると、ない魔力を振り絞って、そのフロアが存在しないと人間たちに思い込ませたのである。

なので、この高級マンションには事実上十三階は存在するが、誰も気付くことはない。

たまに、フードデリバリーのドライバーがミック・ホッパー氏宛ての注文を運んでくることがあるが、そこが十三階であるという事実も、ホッパーという人物にも、取り立てて興味をそえられることはなかった。

ただし、ずいぶんチップを弾んできたという事実を除いて、それ以来しばらく、彼はいかなるチップをも、ケチ臭いと感じるようになる。

こうして見事居住空間を手に入れたホッパーは、フロアにある二世帯分をぶち抜き、自分好みのすみかをこしらえた。

十三階でエレベーターを降りれば、そこが玄関だ。

まっすぐに延びる廊下は乳白色と黒いマール模様のアラベスカート大理石できていて、各部屋に続く黒い扉が並ぶ。

そのドアの一つが寝室につながっている。

明かりのない天井に窓から差し込む夜の光が映り、その中で静かに回るシーリングファンが影を伸ばしていた。

この部屋のカーテンは分厚く、夜だけ開かれる。

都心において十三階は決して高い物件ではないが、ワイドビューからの眺めは悪くなかった。

ガラスの向こうに閉じ込めた街は、人間たちの手によって、チラチラと幻想的に瞬いている。

すぐ脇にはこのビルよりもっと高い建物がそびえているし、窓を開けば街からの騒音も響いてくるけれども、ホッパはそれすらも気に入っていた。

一応悪魔というだけあって、ホッパが見下ろしていたいのは光り輝く街ではなく、人間たちの営みだったからだ。

それと、車と。

もつとも、これも仕事の内とこじ付けられるのはその点くらいで、室内は趣味以外のなものでもなかった。

消臭効果のあるオフホワイトの壁紙は、病院よりも清潔だ。

部屋の隅には空気清浄機兼加湿器がグリーンのランプを点し、毛足の長いじゅうたんには、塵ひとつダニ一匹許されない。

お気に入りの寝室の中で、ホッパはもう一度浅いため息をついた。

そして仰向けに横たわったまま、広い部屋の真ん中に据えられたキングサイズのウォーターベッドの上で、しばらく絶望にふけっていた。

二世帯分の居住空間をぶち抜いた、自分だけの住処。所有物に囲まれて暮らす日々。

これらを手放す日が、いつかやってくるのは知っていた。

地獄には永遠があっても、地上にはない。
しかし、こんなにも早くに訪れるとは思ってもみなかった。
まだ三年なのにな？

「なにを企んでいるの？」

静寂の中に、低い囁きがぽつりと生まれた。
ウォーターベッドがたわみ、ホッパーの隣で、裸のアンジェラが
身じろぎをする。

悪魔は無意識に息を潜めるので、あたかも突然現れたかのように
感じられたが、アンジェラはずっとそこにいる。

何度かは、ホッパーの上だか下にもいた。
人間の恋人同士としてありがちな行為を、ひとしきり済ませた後
というわけだ。

「企んでなんかいない」

ホッパーが天井を見つめたまま答えると、彼女の程よく冷えた腕
がするすると伸びてきて、みずみずしい葦のように彼の胸元に絡ん
だ。

「嘘よ、何か考えてる。ずっとだわ」

「考えちゃいるが、企んでるわけじゃないんだ」

勤めて深刻にならないように、ほのかに笑いながら、ホッパーは
首を傾けてアンジェラの髪に唇を埋めた。

失うものの中に、彼女がいる。

ソファーやベッド、車と同じように、持ち主が去ったところで悲
しみを抱くことのない所有物——だと、ホッパーは思っている。

「行方不明の悪魔のこと？」

いや違う、そのことじゃないとホッパーは思った。
どうして彼女は、そのことに拘るのだろう。
アンジェラがにわかに顔を上げ、目を合わせた。

夜の光に輝く瞳の中で、瞳孔がブラックホールのように丸く開いている。

まともに見つめると吸い込まれそうで、ホッパーは目を伏せた。彼女の整った眉を鼻先でなぞり、まぶたにキスをする。

「そんなに心配なのか、その悪魔のことが」

「違うわ。私が心配なのはあなた」

アンジェラは首を伸ばしてホッパーの唇に吸い付くと、そのまま彼の上にのし上がった。

青い光に、褐色の肌が銀色に輝く。

「あなたを失いたくないの。ずっと私のあなたでいてほしいのよ」
彼女の長い髪がホッパーの顔の周りに垂れ、くるりとカールした毛先が頬をくすぐった。

尖った指が、唇から顎、喉、鎖骨を辿る。

ホッパーは静かに息を飲んだ。

彼女といると、自分の肉体が最高に美しいことを自覚できる。

そして、彼女も最高に美しい。

「俺は……」

ずっと、お前の――

そのとき、ホッパーは彼女の瞳の中に熱い焰を見た。

所有物を見つめるときの瞳――この肉体も、この部屋も、車も、彼女のために存在しているのだ、と思い込みそうになるような、熱いまなざしだ。

ホッパーは咄嗟に彼女の肩を掴むと、彼女を引き倒してその上にまたがった。

アンジェラは驚いたような声をあげ、そして楽しそうに笑った。
ベッドが揺らぐ。

ホッパーはじゃれあうように笑いながら、内心冷や汗をかいていた。

危ない——もう少しで彼女の魔力に惑わされるところだった。もし見つめられたのが人間だったら、この女に所有されることほど名誉なことはないとばかりに、彼女の下僕に成り下がっていたことだろう。

だが、低級悪魔同士では、そんな安い魔術は効かない——効かないっいたら効かない。

「俺だつて失いたくない」

お前は俺の所有物なんだ。

強くそう念じて、アンジェラの顔を両手で挟む。

額どうしをくっつけて鼻を寄せ合うと、彼女は笑うのをやめ、待つように視線を下げた。

にわかに開かれた、暗闇でも艶々と光る唇——触れそうで触れないのは、お互いに焦らしているからだ。

ホッパーは彼女を見つめたまま、ゆっくりと手を滑らせた。

首、肩をなぞって、乳房まで降りる。

一人では手に入れることの出来ない、もう一つの完璧な肉体だ。

掌の中で、硬くなった乳房の突起を感じる。

アンジェラが熱い吐息を漏らし、顎を上げた。

もう少しで、唇が触れ合う——というときに。

不安を掻き立てる断続的なモーター音が、静かな部屋にうるさく響きだした。

素晴らしくタイミングの良い電話だ。

アンジェラは不満そうに喉を鳴らして、眩しい携帯電話を睨んだ。二人の瞳孔がスッと細くなる。

液晶に、低級悪魔たちにとってはおなじみの、恐ろしくも厄介な

上司の名前が明滅している。

「デリカシーがないわね。私、あいつ嫌い」

「しっ、聞こえるぜ。あいつ地獄耳だからな」

やむなく小鳥がついばむようなキスをして、ホッパーは彼女から離れ、携帯を手にしてベッドから足を下ろした。

携帯を掴んだ掌に、柔らかくて張りのあるアンジェラの温もりが残っている。

「ごきげんよう、ホッパー」

ミスター・グランド・ブラックは上機嫌だ。

明るい液晶の光のせいで、夜の闇が濃くなったように感じる。

ホッパーの中で、眠っていたはずの鬱々とした感情が鎌首をもたげた。

「こんばんは、どうも。珍しく楽しそうですね」

皮肉たつぷりに言うと、上司は静かに笑い、「楽しくて仕方がない。ロスで働いている間抜けな悪魔が一人、脱落してね。今、私の百メートルほど下で泣き喚いている。どんな音楽にも勝るよ。それよりホッパー、例の魂はどうなった？」と、皮肉たつぷりに返してきた。

くそっ、やっぱりこいつ、俺が魂を失うのを事前に知ってやがったんじゃないのか。

そもそも昨日の電話——今から魂を手に入れるというときに、出し抜けにかけてきたあの説教電話は、“せいぜい奇跡が起ころぬことを祈るがいい”という、捨て台詞のためだけに掛けてきたようなものだった。

そして魂を得られなかった今も、白々しく状況報告を迫っている。グランド・ブラックは知っていたのだ——あるいは、彼が仕組んだことなのかもしれない。

背後で、ベッドの上のアンジェラ、絨毯、壁紙、テレビ、バスル

ーム——すべてが闇に沈んでいくような気がした。
俺は所詮、上級悪魔の憂さ晴らしのタネに過ぎないのか。

危機というものは、実際に突きつけられるまでは実感のわからないものだ。

数分前までの根拠の無い余裕も、今は霧となって闇に散った。

「ええ、まあその……」

上手い言い訳を考えておくべきだったと後悔した。
やっぱり寝てる場合じゃなかった——それも、わかり切っていたことなのだが。

上司は黙って待っている。

失態を自らの口で告白させるつもりなのだろう。

「病院へは行きました。その、なんというか」
意味のない言葉を並べて時間を稼ぐ。

絶対にうまくいきます——あれだけ豪語しておいて、なんと云えばいい？

魂は奪われました、今は自宅待機中です、か？

オフィスチェアの肘掛に腕を立てかけ、頬杖をつくグラウンド・ブラックの様が、ありありと浮かんた。

ニヤニヤと笑いながら、組んだ足のつま先で、地の底から響いてくる哀れな低級悪魔の歌声にリズムを刻んでいることだろう。

ホッパーは唇をかんた。

おそらく、あらゆる言い訳は無効だ。

「結論だけ申し上げますと、」苦々しい思いをぼそぼそと吐き出す。
「魂は、手に入りませんでした。とりあえず、今日のところは」
「ほづ」上司の面白がるような合いの手が入った。「今日のところ

は？ 貴様のくだらん物語は、次回へ続くのか？」

「ああ、ちくしょう……」

食いしばった歯の隙間から、小さく呻く。

「なんだ？ 聞こえないぞ」

ミスター・グランド・ブラックは、鼻であざ笑うように言った。

シナリオが決まっていたというのなら、もはや結末は変わらないのだ——次回へは続かない。

もはや最後に彼が出来ることといえば、呪いの言葉を呟くことくらいだった。

シット・タード・ファック・アスホール・クラブ・ドーク……
なんだってんだ
ジーザス・クライスト！

この三年間で習得した、人間オリジナルの呪いの言葉だ。

「どうせ、もうおわかりでしょう？」

ホッパーは喧嘩腰に喚いた。

「すべてあなたの思いどおりですよ、まったく。俺の魂は天——っ」

そのとき、いきなり後ろからアンジェラの腕が伸びてきて指先で横腹をくすぐったので、発作的に息を飲んでいた。

背中に乳房が押し当てられる。

ホッパーは慌てて携帯を顔から離すと、声を押し殺し怒鳴った。

「電話中だ！」

しかし、彼女は彼の肩越しに悪戯な笑みを浮かべるばかりだ。

「なんだ？」

少しイラついた声がして、ホッパーは電話に戻った。

「いえ、こつちのことです。なんでもなっ——」脇腹に爪を滑らせるアンジェラの手を捕まえて言う。「なんでもないですよ」

たった今、自分がやけを起こしかけていたことをすっかり忘れて、その場を取り繕っている。

これは職業病だろうか。

「なんでもない？」

グランド・ブラックがじれったそうに言う。

「ええ、なんでも。よせよ、こらっ——とにかく、大丈夫です。魂は必ず取り戻しますから」

アンジェラの悪ふざけを止めさせたいあまり、特に考えもなくそう言っていた。

「取り戻す？　ずいぶん自信だな」

電話の向こうから、面白くなさそうな声がする。

どうやら上司は、泣き叫んで許しを乞われるのが願望だったようだ。

サデーストめ。

ホッパーはアンジェラを睨んだまま「ええ、取り戻しますよ。見当もついている」と電話に言い、「いい加減にしろ、アンジェラ。今の俺の状況がわかってるんだろう？」と、目の前の女を叱りつけた。「言っただけよ」アンジェラは聞き分けのない子供のように微笑んでいる。「私に命令はできない」

アンジェラには、ホッパーのどこが弱いのが手に取るようになってわかってるのだ。

それはもちろん、肉体的ではなく——精神的に。

「！」

ホッパーはぎょつとして自分の脇腹を押え、その手を見つめた。うつすらと血がにじんでいる。

彼の前で、艶めく唇が弧を描き、その端に牙をのぞかせる。

アンジェラが手を横なぎに払う。

鋭く光る赤い爪が、間一髪身を引いたホッパーの頬を掠めた。

猫じやらしにどうしようもなく反応してしまう猫のような、攻撃的だが殺傷目的ではない一撃だった。

「冗談はよせ、今はそれどころじゃない！」

彼女がクスクスと楽しげに笑う様子は、かまって欲しい子供が大人をからかって遊んでいるかのようなのだ。

まったく、こっちの気も知らないで！

ホッパーは苛々しつつ——しかし、どこか楽しくなりながら——彼女の攻撃に応戦した。

「私も結論を言おう」

かろうじてホッパーの耳元に保たれている携帯電話から、グラント・ブラックが真面目な話をするときの低い声色で言う。

それを聞きながら、ホッパーは首元を狙ってきた鋭い突きをいなし、無防備になった彼女の脇を狙う——アンジェラはくねるようにベッドに伏せ、それをかわした。

「貴様は魂を取り逃がした。手に入れば地上に残ることが許されたであろう、最後の望みをだ」

裁判官が槌を重々しく叩き鳴らしたような衝撃を伴う、明確で的確な結論だった——が、ホッパーは伏せたアンジェラを取り押さえるために両手を使ったので、耳から離れた電話からの声はよく聞こえなかった。

「ほら、捕まえたぞ」

アンジェラはひとしきりクスクス笑うと、不意に大人しくなっただけとホッパーを見つめた。

尋ねるような眼差しは、従順で、かつ貪欲な人間の女を演じる瞳だ。

押さえ込んだ細い指が、その手を握り返す。

興奮が、別のものに変わろうとしていた。

「マイケル・ホッパー、貴様は地獄へ送還される」

ホッパーの左手に掴まれている携帯電話は、ベッドに押し付けられていた。

ミスター・グラント・ブラックの得意げな声はベッドマットに吸

収され、くぐもって何を言ってるのかわからない。

アンジェラのもう片方の手が彼の肩甲骨を這い登り、ねだるよう
にゆっくりとなる。

もうさつさと電話なんか切ってしまおう、とホッパーは思った。
結論は変わらないのだ。

「それで？」

携帯を耳にもっていき、アンジェラを見つめたまま、ため息の混
じった声で言った。

少し震えたのは、彼女が背中では指を下へ滑らせたからだ。

その震えを恐怖ととったのか、グランド・ブラックはにわかに機
嫌を直したようだった。

「知っているはずだ。面倒見のいい上級悪魔たちが、哀れな貴様の
ために時間を割いて集まってくる。ありがたい話だろう？」

極上の愉しみを見つけたとでも言うように、グランド・ブラック
は言った。

そのとき、出し抜けにアンジェラが身を寄せてきて、吸血鬼のよ
うな獰猛さで首筋に食らいついたので、ホッパーは思わず熱い息を
漏らした。

「ああ……。ええ、とても」

ほとんど上の空で答える。

「聞いているのか？」今聞こえたのは甘美のため息ではないだろう
かと疑うように、電話が声色を強めた。「まさか、貴様とてそこま
で馬鹿ではないと思うが……。本当にありがたいなどと思っている
わけではないだろうな？ わかっているだろう、地獄に連れ戻され
た低級悪魔に何が起こるのか。あの惨劇を一度たりとも見なかった
わけではあるまい」

まるでジョークの説明をさせられたコメディアンのように、決ま

りの悪そうな声だった。

しかし、そのとき二人は濃厚なキスをしていたので、グランド・ブラックの言葉を聞き逃した。

「……ぞくぞくするな」
スリリング

溶け合うようなキスの合間に、どうにか囁く。

もはや電話のことなどどうでもよくなっていた。

再び唇を重ね、今度はさっきよりも深く、激しく、貪欲に舌を絡ませた。

熱い乳房を通り越し、ホッパーの指はまっすぐ、彼女の下腹部を滑り降りた。

「スリル・オフ・テラー恐怖の戦慄だ。貴様はいま、絶望の谷へ片足を突き出し、踏み込もうとしているのだぞ」

ホッパーの手に掴まれたままの携帯電話が、不安げにしゃべっている。

しかし、それもやはりどうでもよかった。

彼が踏み込もうとしている谷は、深くて狭く、とろりと熱い。

「——ああ」

「……」

グランド・ブラックは、途切れ途切れの喘ぎ声を聞きながら、電話の向こうで思った。

もしかやこの悪魔には、あらゆるサディスティックな仕打ちが無効なのでは——つまり、コイツは極度のマゾヒストなのではないか。

そうかあるいは、完全に壊れたかのどちらかだ。

いずれにせよ確かなのは、ちっとも楽しくないということである。せつかく怖がらせてやろうと思ったのに、とんだ肩透かしだ。

「まあいい」グランド・ブラックは途端につまらなくなり、吐き捨てるように言った。「よく聞けマイケル・ホッパー」

返事はない。

聞いているのかどうか怪しいが、とりあえず声を大きくして続けた。

「貴様には、まだ働いてもらわなければならない。いいか、なんとか、奪われた魂を見つけ出すんだ」

大きな波が押し寄せようとしていた。

潮が引き、苦しくなり、そして、巨大な波になって――

「えっ、はいっ？　なんですって？」

最後の瞬間を目前に、ホッパーはぴたりと身体を止めた。

彼の下で、アンジェラが不満そうに唸る。

「一刻も早く魂を見つけ出せと言っているんだ！　まったく、今度私に二度も言わせるような真似をしたら、耳を火掻き棒でほじくつてやるからな！」

電話が怒鳴った。

あまりに信じがたい言葉だったので、ホッパーは危つくもう一度尋ねそうになった。

耳は、わざわざほじくつてもらわなくても十分清潔だ。

自分の解釈が間違っていないければ、どうやら猶予が与えられたらしいのだが、にわかには信じられない。

「ええ、気をつけます。でも、」

なぜだ――と疑わずにはいらなかった。

さっきは、地獄へ送還されると言ったくせに。

焦れたアンジェラが、ホッパーの下で腰を動かす。

誘うように太ももで彼の胸を締めたが、ホッパーはすっかりそん

な気分ではなくなり、彼女から離れてベッドを降りた。

「ミックったら！」

「しーっ」

上質の羽毛が詰まった白い殺意が飛んできて、彼の後頭部を柔らかく打った。

しかし、今はそれどころではない。

「厄介なことが起こっている」

「厄介なこと？」

「オウム返しにするな、黙って聞け、ばか者。いいか、これは——」
グランド・ブラックは一瞬言葉につまった。

そして沈黙の末に、ホッパーが喜びそうな言葉を見つけたらしかった。

「これは極秘任務だ」

極秘任務——その響きは、一瞬にして彼を虜にした。
なんて良い響きだ！

ホッパーはとっさにベッドを見た。

アンジェラがシーツを跳ねのけ、バスローブを引っ掛けて、憤慨した様子で寝室を出て行くところだった。

「誰にも漏らすんじゃない。最高機密だ、わかったな？」

「もちろんです」

上ずった声で答える。

まさか、これも何かの陰謀か？

ホッパーは悪い可能性を挙げて、努めて冷静さを欠くまいとした。しかし、彼の表情はどうしようもなく綻んで、嬉しさと高揚を抑えることができない。

なにしろ、任務を与えられるということは、すなわち地上へ残留が認められたということなのだ。

そんなホッパの興奮ぶりは、電話越しでも十分伝わったことだろう。

グランド・ブラックは咳払いをすると、声を殺すようにして厳かに話し始めた。

「地上界で不可解な現象が起こっている。人間の魂が不正に狩られているのだ。その魂は地獄に堕ちて来ず、天国にも昇っていない。地上界のどこかで何者かが集めているようなのだが、行方が掴めない」

ホッパは口を開いたが、オウム返しにするなと言われているのを思い出して、発言を控えた。

「貴様の狙っていた魂もだ。たしか、オーガスト・スミスだったか。天国に昇ったという情報は入っていない。ということは、まだ地上のどこかにあるはずだ」

何者かが、地上界で魂を集めている。

病院ですれ違った天使のことを話すべきか——と思ったが、いまいち確信に踏み込めずに思いとどまった。

代わりに、気づいたことをふと口にする。

「幽霊^{ゴースト}になつて地上を彷徨つてる可能性は？」

人間の魂は、死んでもしばらく肉体にとどまり、天使あるいは悪魔の迎えを待つ。

しかし稀に、彼らの目をかいくぐったり、フライングで肉体を離れてしまう魂がいて、たちの悪い霊となる者もいる。

そうなると、その魂はお尋ね者だ。

「人の話をよく聞け、そして頭を使え、ウスノロめ」ミスター・グランド・ブラックは惜しみなく罵倒の言葉を添える。「たとえ幽霊になつたつて、魂は地獄から逃れることはできんだ。もちろん、天国からもな」

どんなに地上で働く悪魔が出来損ないでも、と、彼は付け加えた。ホッパは少しばかり恐縮し、口をつぐんだ。

やっぱり、黙って聞いていたほうが賢明だ。

「とにかく貴様がすべきことは、それらの魂を一刻も早く見つけ出すことだ」グランド・ブラックは声を張って言った。「同時に、魂を集めるその食わせ者を捕らえる」

ホッパーは「わかりました」と答えようとして——後に続いて聞こえてきた言葉に目を丸くした。

「えっ、捕らえる？」

地上界で魂を隠し通せるような、絶対に自分より魔力のありそうな相手を、捕らえる？——俺が？

「あのう、」

「わかったな？」

「ええ。ですが、その、俺はあまり魔力には自信がないし……」

捕らえるという言葉によって、ホッパーは極秘任務への魅力を一瞬にして失った。

だいたい、不正を働く輩を捕らえるという行為は、悪魔向けではない気がする。

そういうのは天使がやるべきであり、波風立てず平穏に暮らしたいと願う低級悪魔には、あまりにもリスクが高い。

八つ当たりですら恐ろしいのに、逆恨みを買えばどういうことになるのかは、おのずと見えてくる。

ミッション・インポッシブル——俺は愛国心溢れるスパイじゃない。

「ふん」グランド・ブラックは、いささか嬉しそうに鼻を鳴らした。「断れると思っているのか？」

「……」

断れるわけが無い。

永遠の苦痛か、地上居住権かといわれれば、それはもはや選択の

余地すらないのだから。

「まさか、断るだなんて。007になった気分ですよ」
わざと明るく言う。

「なんだ？」

グランド・ブラックは、どうやらイギリス一有名なスパイを知らないらしい。

いいえ何でも、と小さく言って、ホッパーはうなだれた。
なんとも、荷の重い任務だ。

「安心しろ、貴様がそこまで出来るわけがないということも十分見越して、有能な協力者を用意してある」

「協力者……？」
パートナー

確かに、スパイ作戦には相棒が必要だ。

だが、残念ながら心は躍るところか、嫌な予感に曇る一方だった。
こき使われた上に八つ当たりの専属サンドバッグにされるような相手とは組みたくないし、かといって自分より使えない相手なんて——いたら驚きだが——不要だ。

「誰ですか？ 俺の相棒は」

「おそらく、向こうからコンタクトを取ってくるだろう。足を引く張るんじゃないぞ。とにかくこの件については、早急にな」

会話口から、電話を切りたがっている様子が伝わってきた。

「ええと、ミスター・グランド・ブラック、」

電話を切られるのが、妙に不安だった。

「魂を取り戻して、犯人も捕まえたら、俺は——」

「ふふふふ……」

闇が震えたような笑い声に、思わず息を呑む。

不意に背後に現れた何者かが、ホッパーの耳にぴったりと口をつけて囁いた——ような、感覚にとらわれる。

「貴様が、地獄へ送還されることはなくなるだろう」

静かに笑う声が首筋をくすぐり、ゾクリと鳥肌が立つようだ。
ホッパーは、からからになった喉を潤そうと、ごくりとつばを飲み込んでから、どうにか「わかりました」と答えた。

途端に、眠りから覚めたような気がして、ホッパーは辺りを見回した。

電話は切れている。

部屋には、自分独りしかない。

もしかして、今のはすべて自分の妄想が生み出した夢なのではないか、という気がした。

ありえなくはないだろう。

地獄に連れ戻される絶望から逃れたい一身で、夢を見ていたという可能性もある。

いや、むしろ夢だったほうがいいのかもしれない。

そうだこれは夢——「メールが届きました」

突然、携帯電話が紳士的な声で言った。

画面に視線を落として、ホッパーは力なく瞬きをした。

『ボサツとしてる暇があったら、さっさと行動しろ、グズめ』

あの人、メールも使えるようになったのか。

ホッパーは少しだけ関心した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2142p/>

Lucky Devil !!

2011年10月18日03時28分発行